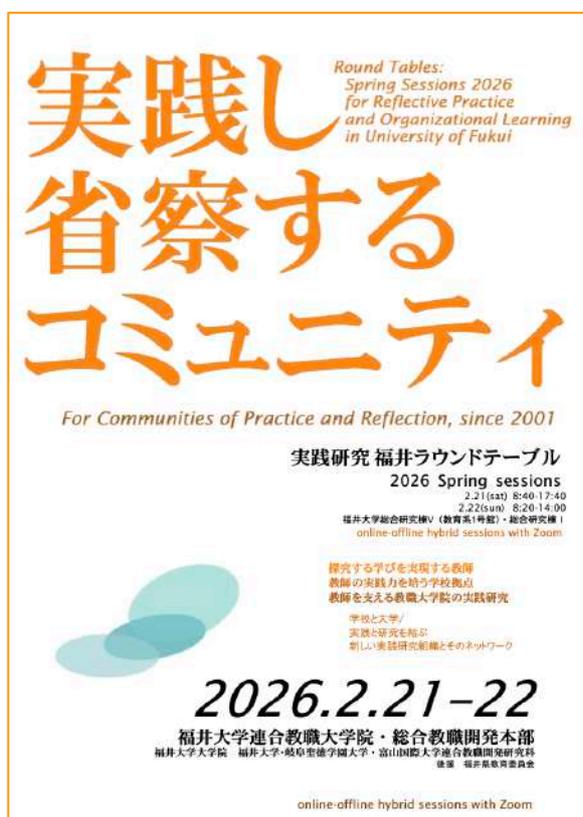




実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2026

Hybrid (対面-Online) Spring Sessions 特集号



内容	
ラウンドテーブルの魅力	(2)
全体スケジュール	(3)
Keynote Session (Session I)	
教職大学院改革特別フォーラム	(4)
Poster Session	(5)
Zone Session (Session II)	
Zone A 学校	(5)
Zone B 教師教育	(6)
Zone C コミュニティ	(7)
Zone D International	(8)
Zone E 探究	(9)
Zone F インクルーシブ教育	(10)
Round Table Cross Sessions (Session III)	(11)
実践し省察するコミュニティを結び支える	(12)
ラウンドテーブルの歩み	(14)
福井大学連合教職大学院が実践する教育改革 グローバルコミュニティへの誘い	(17)
アーカイブ	(19)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2026年2月の開催をもって50回の節目を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSpring Sessionsを開催いたします。

この2日間の豊かな交流が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもとともに育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

ラウンドテーブルの魅力

福井大学連合教職大学院 連合教職開発研究科 准教授 山浦 光雄



私は、長野県教育委員会より交流人事で本教職大学院へ派遣されており、3年目となっている。3年前の2月、初めて本教職大学院のラウンドテーブルに参加した。また、この3年間はスタッフとして、ラウンドテーブルの運営に携わってきた。いわば、外側からも、内側からも本ラウンドテーブルに関わってきたわけであるが、本ラウンドテーブルについて、ずっと不思議に思い、考え続けていることがある。それは、「なぜ、このラウンドテーブルには、こんなにたくさんの方が集まるのだろうか」ということである。例年、7月のラウンドテーブルには700人、2月のラウンドテーブルには1000人を超える方が集まっている。ここでは特に、2日目のラウンドテーブルについて、私が考えるその理由を書き、本ラウンドテーブルの魅力にせまってみたい。

理由として考える1つ目は、「語られる内容の自由さ」である。持ち寄るレポートの縛りは、「実践報告」のみである。レポートの枚数も、書式も、内容も、語り手に委ねられている。縛りがないからこそ、その人らしいレポートとなる。その人らしいレポートであるからこそ、語りも自由に、その人らしくなる。その人らしい語りであるからこそ、聴き手も思わず惹き込まれて聴き入る。

2つ目は、「じっくりと聴いてもらえる雰囲気」である。運営スタッフとして、写真撮影等で各フロアを回ると、どのグループにも、顔を突き合わせ、じっくり「聴く」雰囲気が満ちている。その雰囲気を生み出しているのは、上記した、聴き入ってしまう「その人らしい語り」があるからだろう。また、ファシリテーターや大学院生の存在も大きいと感じる。福井大学教職大学院の学びでは、この「聴き合い」がすべての学びのベースとなっており、その意味や価値を、スタッフも、大学院生も、肌身にしみて感じている。その人たちが醸し出す「聴く」姿勢が、初めて参加されている方や、グループメンバーにも伝播しているように思う。

3つ目は、「集まる人たちの多様さ」である。教師、保育士、企業で働いている方、公民館の館長さん、高校生など、様々な職種、所属の方が集まっている。また、全国の様々な県から、あるいは様々な国から、参加者が集まっている。多様な方の実践を聞くことができるよう、運営側も声かけをして、多様な人を集めている。多様な人が集まることで、いつも接する人たちから得られるものとはまた違う視点が得られる。それが新鮮であり、刺激となり、学びとなる。

4つ目は、「聴いてもらえること、語らせてもらえることから生まれる、なんとも言えない充実感」である。自分が初めてラウンドテーブルに参加し、会場を後にする時、この、何とも言えない充実感と、明日からまたがんばろう！という前向きな気持ちで満たされていたことを覚えている。実は、人は、日常生活の中で、こんなにじっくり自分の話を人に聞いてもらえることはあまりないのではないだろうか。また、さえぎられることなく、こんなにじっくり語らせてもらえることはあまりないのではないだろうか。そんなことを考えていた。聴いてもらい、語らせてもらい、聴かせてもらう中で、相手が見えてくる。そして、自分が見えてくる。自分の今いる場所が、語り合いの中で、照らし出されるように見えてくることで、明日から歩み出す方向が見えてくる。その充実感が忘れられなくて、人はまた、このラウンドテーブルに足を運ぶ。私の知人にも、この半年に一回のラウンドテーブルに、遠方より欠かさず参加している方がいる。

今回ご参会の皆様は、様々な動機や理由をもって、本ラウンドテーブルに集まっていらっしゃるのだろう。2日間の「実践研究 福井ラウンドテーブル」をたっぷり味わっていただき、その間に、少し、周りを見渡しながら、「なぜこんなにたくさん人が集まっているのだろう」と、考えていただけたら幸いである。そこで見えてくる理由の中に、本ラウンドテーブルの魅力と、福井大学教職大学院の学びの魅力が詰まっているのではないかと、私は感じている。

全体スケジュール

実践研究
福井ラウンドテーブル
2026 Spring sessions

2/21 (sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00
多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成をいかに加速するか
—大学・研修機関のこれからの役割— Zoom

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人-(対面/Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒-(対面/Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える 6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校:子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ 対面/Zoom
- B 教師教育:激論!ド～する?“養成観の転換” 対面/Zoom
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする 対面/Zoom
—「変わりながら続く」という営み—
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning Zoom
- E 探究:チェンジメーカー(変化の担い手)になる学びのデザインプロジェクト 対面/Zoom
- F インクルーシブ:「個」の視点から教育を再考する 対面
—育ち合う子どもたちとコミュニティ—

2/22 (sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。次の URL から申し込み可能です。 <https://forms.gle/Dnh5hieH1ZTf9dE29>
- 2/22 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。
- 2/22 の session III の参加についてのお願い＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願ひいたします。プログラムの変更等があり得ます。最新情報を教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2026.2.21-22

2/21 (sat)

Session I

実践研究福井ラウンドテーブル 2026 Spring Sessions

2月21日(土) 8:40-11:00 Session I 教職大学院改革特別フォーラム
(オンライン)多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成をいかに加速するか
～大学・研修機関のこれからの役割～

現在、中央教育審議会・教員養成部会では、子どもたちが主体的・対話的で深い学びを通じて、これからの VUCA ワールド、ウェルビーイング社会の中で、自らの人生を舵取りする力を育み、民主的で持続可能な社会の創り手となっていくのを支えていく「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策」の議論を進めています。そこで本フォーラムでは、同部会及びワーキンググループで進めている議論の動向を確認、共有した上で、教員養成における“養成観の転換”にチャレンジしてきた福井大学の実践を事例として紹介します。そして、先行して進んできた“研修観の転換”の窓から現在の議論と福井大学の事例はどのように見えるのかを共有し、「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するため」の大学・研修機関のこれからの役割を探っていきます。

アジェンダ

1. イントロダクション（趣旨説明） 福井大学 木村優
2. 教員養成部会の議論の紹介：論点整理と現在の検討状況 文科省教員養成室 若林徹 室長
3. 福井大学における“養成観の転換”に向けた歩みと挑戦 福井大学 遠藤貴広・木村優
4. “研修観の転換”の窓から議論・実践はどう見えるか？ 教職員支援機構 荒瀬克己 理事長
5. ディスカッション

司会 福井大学 中森一郎

Zone A テーマ：子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ

Zone Aでは「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」をテーマとして掲げ、子どもの学びのプロセスを大切にしながら、子どもたちの遊びや生活、学習、そして大人たちが学び合っていく活動を展開していくことについて考えてきました。「主体的・対話的で深い学び」と同時に「チーム学校」「こどもまんなか社会」「co-agency」といったことが提起されてきたように、今、子どもたちが主体的に学びを深めていくために、一層、学校や園、地域で支えていくことが求められています。

前回のシンポジウムでは、保育の実践において、「給食」に関わる子どもたちのおしゃべりが「こども給食研究会」へ発展し、「食」をめぐる探究を、多様な他者との対話を通して深めていくプロセスが報告されました。また、中学校理科の実践において、校庭の動植物を調べる活動の中での「食べたい」という生徒の思いから、野菜を栽培して食べるという活動を展開しながら、理科としての見方・考え方を育てていくプロセスが報告されました。2つの報告から、子どもの言動を丁寧に見取り、対象と関わる中で発せられた発想や行為を活かし、活動を共に生み出していく保育者・教師の姿勢を感じました。シンポジウムにおいては、こうした実践が一人ではなしえず、園として、校内の理科部会として、学校として支えられてこそ実現できるのではないかとすることも話題となりました。

今回のセッションでは、2つの話題提供を基に語り合います。長野県の学校からは、小・中が一つとなる義務教育学校化の動きの中で、子どもたちや先生方、地域の方々が協働し、コミュニティを培いながら、新しい学校づくりに向かってきたプロセスが報告されます。また、福井県の学校からは、保健体育科として、技能の習得や運動量の確保だけでなく、多様な子どもたちが、主体的に教科の見方・考え方を働かせることのできる授業を目指し、同僚と協働し、教師の学び合うコミュニティを培ってきたプロセスが報告されます。

子どもの主体的な学びを支えるコミュニティについて、参加者の皆様と一緒に探っていきたいと思います。

☆ハイブリッド開催

Connection	14:25-14:40	オンライン接続
Orientation	14:40-15:00	オリエンテーションと自己紹介

【Session I】

テーマ 「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」

<話題提供>

15:00-15:20	長野県栄村立栄中学校	教頭 田中新一
15:20-15:40	福井大学教育学部附属義務教育学校	教諭 赤尾昌倫
	コーディネーター：福井大学教職大学院	岸野麻衣

<全体討議> 15:40-16:10

私たちは、「主体的な学び」を子どもとの相互作用を通してどのように組織していくことができるのか、話題提供をふまえて皆様と共に探っていきます。

<休憩> 16:10-16:20

【Session II】 16:20-17:40 Cross-session

Session Iの議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

実践研究福井ラウンドテーブル 2026 Spring Sessions
2月21日(土) 14:30-17:40 Session II Zone B 教師教育フォーラム
(対面・オンライン ハイブリッド)

「激論！ド～する？ “養成観の転換”」

現在、中央教育審議会・教員養成部会では、子どもたちが主体的・対話的で深い学びを通じて、これからの VUCA ワールド、ウェルビーイング社会の中で、自らの人生を舵取りする力を育み、民主的で持続可能な社会の創り手となっていくのを支えていくための教員養成の変革に向けて議論を進めており、そこで“養成観の転換”が主要テーマに据えられています。同部会の論点整理では現状のところ“養成観の転換”として、(1)実践機会の充実、(2)多様な学習方法を通じた「学びのトータルデザイン」、(3)デジタル活用による学習環境の拡張、の主に3点が挙げられています。しかし、これらの提起の根幹にある「観」の転換については不明なままです。そこで本フォーラムでは、“養成観の転換”にかかわる多様なステークホルダーをゲストとしてお招きし、参会者のみなさまと共に「激論！ド～する？ “養成観の転換”」として“養成観の転換”の実態、その転換を阻む壁、その壁をブレイクスルーしていくための基本的な考え方を協働探究していきます。

司会 福井大学連合教職開発研究科 木村優
ゲスト 文科省教員養成室 若林徹 室長
教職員支援機構 百合田真樹人 教授
大阪教育大学・峯明秀 教授
横浜市教育委員会 丹羽正昇 学校教育部長
福井県教育庁 増山温子 教職魅力発信ディレクター
他（現在“養成観の転換”にかかわる方にも依頼中です）

テーマ ①求められる“養成観の転換” 何から何に“転換”するのか？
② “養成観の転換”を阻む「壁」は何か？それをどう乗り越えるのか？
③ 「OECD ティーチング コンパス」リリース！ “養成観の転換”に何をもたらすか？
④ “養成観の転換”をどう実現するか？

進め方

- テーマに即してゲストに見解を示していただき、ディスカッションを行います。
- 参会者のみなさまもテーマに即したグループ対話を行います。
- グループ対話をふまえて、ゲストと一緒にディスカッションを深めていきます。

ZoneC コミュニティ

実践研究福井ラウンドテーブル2026春

Zone C コミュニティ

持続可能な
コミュニティを
コーディネートする

「変わりながら続く」という営み

2/21 sat

14:30-17:40

オンライン開催

続くとは、同じことの繰り返しなのだろうか。

もしかしたら、続くとは変わり続けることなのかもしれない。

そのような変化はどのように生まれ、何を動かしていくのだろうか。

何かを続けようとする時、私たちは、これまでと同じ形を守ろうとします。そこには安定への願い、そして未知への「ためらい」があるのだと思います。

前回のZoneCでは、「ためらい」の奥底に「変化と多様への希求」が息づいていることを発見しました。何かを守りつつも、何かを変えたいという願いが確かにそこにありました。

続くという営みは、同じことの繰り返しではなく、関わりと実践の場に宿る可能性が、新たな形となって発現し続けること、つまり、変わり続けることなのではないでしょうか。

今回は、「東郷地区おつくね祭」を取り上げます。変わりながら続いてきた、地域の大切な営みです。ひとつの祭を手がかりに、変化と持続の関係をともに探っていきます。

●話題提供 福井市東郷地区の変化と持続を支えるみなさん
おつくね祭実行委員会・ふるさとおこし協議会・東郷広報部など

●タイムテーブル

14:00 ~ オンライン接続開始

14:30 ~ 15:30 主旨説明・話題提供・対談

15:30 ~ 17:40 小グループ対話・全体対話

(ファシリテーターの進行で安心してお話しいただけます)

ZoneCは、地域・学校・企業・NPO・行政など、さまざまなコミュニティにまつわる実践や関心を持つ人たちが集う対話の場です。事例に耳を傾け、小グループで対話し、みんなで気づきをわかちあいます。

コミュニティに関心がある方なら、世代にかかわらずどなたでもご参加いただけます。ためらいを抱えたままで大丈夫。多様な皆さんとの対話を通じて、ZoneCもまた変わりながら続く営みになればと思います。

主催：福井大学連合教職大学院

趣旨詳細



参加申込



Zone D International

Saturday, February 21st, 2026 15:00 – 17:30 (Japan Time)

International Initiatives on Collaborative Learning Professional Development through Lesson Study



Hosted by The University Of Fukui, Japan

The Fukui Roundtable is held biannually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study. In July 2025, teachers from the University of Fukui Attached School conducted lesson study with teachers from Uganda and Malawi at the Kalinabiri Secondary School in Uganda.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and "Roundtable." In the symposium, the symposiasts will discuss the biology lesson study conducted in Uganda. In the "Roundtable," educators from various countries will reflect on the Symposium and also share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

ZoneDでは、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。加えて、2021年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。2025年7月にウガンダ共和国のKalinabiri中学校にて、福井大学附属義務教育学校の教員がウガンダ・マラウイの教員と共に授業研究を行いました。その際の記録をもとに、今回は授業研究と教員の専門能力開発について探ります。このZoneにおいてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。なお、本セッションは英語での議論となりますが、**日-英の通訳を行います**ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用のZoomに接続するためのデバイスを別途ご用意ください。

International Initiatives on Collaborative Learning: Professional Development through Lesson Study

< Symposiast >
Kojun Sasaki
University of Fukui Attached School,
Japan

< Symposiast >
Reymick Oketch
Makerere University, Uganda

< Symposiast >
Mary Achlieng
Kalinabiri Secondary School,
Uganda

< Symposiast >
Jeremiah Kampazangula
Nalikule College of Education,
Malawi

[Session I] 15:00-16:00 Symposium
<Moderator> William Tjipto, University of Fukui <Commenter> Takuya Numajiri, University of Fukui

[Session II] 16:00-17:00 Roundtable
Following Session I , participants will reflect on the Symposium and share their own practice in small groups

[Sharing Roundtable Session] 17:00 – 17:20 Share and reflect on discussions during the Roundtable

[Closing] 17:20-17:30 Masakatsu Komori, University of Fukui



[Register Online at the QR Code or URL]
<https://forms.gle/hZiWxmjxW3oBJ8Pt5>

(Registration closes on February 13th)

[The United Professional Graduate School of
Professional Development of Teachers, University of Fukui]

<https://www.fu-edu.net/en/>

[Contact] William Tjipto, wtjipto@u-fukui.ac.jp

Zone E 探究

実践研究福井ラウンドテーブル2026
SPRING SESSIONS

ZONE E 探究

学びと教えの新しいすがたカタチをみんなで考える
チェンジメーカー(変化の担い手)になる
学びのデザインプロジェクト



あなたは「 」をあそべていますか？
わたしは「 」をあそべているんだらうか？



今回もまた、
生徒・学生・教員・
社会人が入り混じり、
どんな化学反応が生ま
れるのが…
乞うご期待★

今年度も
福井大学教育学部附属義務教育学校の
「在籍生」・「卒業生」が内容を
企画・検討しています★

タイムテーブル

★	オープニング
	ワークI_あそんでみよう！
	休憩 & ウォークスルー
	ワークII_あそびってなんだらう？
	休憩 & ウォークスルー
★	ワークIII_「 」をどうしたらあそべる？
	クロージング

2026年
2月21日(土)
14:30～17:40

[開催方法]

ハイブリッド

対面会場：福井大学文京キャンパス
総合教育研究棟13F大会議室
オンライン (ZOOM)

ご発表いただいた方には、福井大学大学院発行の「発表証明書」を贈呈いたします。

11:20～12:20

ポスターセッション
(大学生・社会人)

13:10～14:10

ポスターセッション
(子ども)

14:30～17:40

ZONE E

Zone F インクルーシブ

ZoneF インクルーシブ

「個」の視点から教育を再考する -育ち合う子どもたちとコミュニティ-

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性とは特定の人々だけの問題ではなく、私たち一人ひとりが固有の存在として生きることそのものを指します。つまり、インクルーシブ教育とは、すべての子どもが「あるがまま」に生き、育つことのできる教育の構築に向けた探究のプロセスであるといえます。こうしたビジョンのもと、「ZoneF インクルーシブ教育」では、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

個に寄り添うことと、子どもが属するコミュニティを育てることは、しばしば両立が難しい課題として立ち現れます。これまで、ZoneF では、それぞれの子どもが思いや願いをもち、自らの力を発揮するためには、共に在る教師の存在と安心できるコミュニティが欠かせないこと、また、競争より協働、効率より創造を重視する教育こそが個とコミュニティの相互の育ちを支える基盤となることを確認してきました。

こうした視点を踏まえ、実践研究福井ラウンドテーブル 2026 Spring Sessions では、個に寄り添いながら、コミュニティの中で、そしてコミュニティとして育っていくプロセスをどのように実現していくのかを、参加者の皆様と共にさらに探究していきたいと考えています。

14 : 30-14 : 40 オリエンテーション

14 : 40-16 : 15 シンポジウム

話題提供者：越前市武生第一中学校 PEREIRA DOS SANTOS TIAGO (サントス・チアゴ) 氏

ブラジル生まれで10年前に来日。ポルトガル語、英語、日本語が堪能で、現在は福井県越前市の日本語初期指導員として、武生第一中学校を中心に市内数校の小中学校に在籍する外国籍の児童生徒の学習支援に携わっている。外国にルーツがある児童生徒が日本の学校で学ぶ中で必要とする多方面の支援（日本語教育、文化への適応、他の児童生徒とのコミュニティづくり、母語支援、進路相談など）について話題提供していただきます。

旭川市立北門中学校 曾我部 昌広氏

北海道旭川市内・近郊の中学校で、通常学級の担任ならびに数学科教諭として36年間勤務。通常学級において障がいのある生徒カズキさんを担任した経験から、カズキさんを含めた学級コミュニティの生徒たちが学び合い、ともに育っていった実践の歩みについて話題提供していただきます。

コーディネーター：福井大学 藤岡 徹

16 : 30-17 : 40 フォーラム (小グループでの語り合い)

Session III

2/22 (sun)

Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

【対面/オンライン】		【はじめに】
①はじめに	8:20-8:40	ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。 それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 【報告】 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
②自己紹介	8:40-9:00	
③報告Ⅰ	9:00-10:40	
④報告Ⅱ	10:40-11:40	
⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	
* オンライン参加の方は、8:20 までに接続願います		

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聞き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を迫走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実は動かしがたい。そうし

た暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2025.7

2001.3.17-18	春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして 木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
2001.11.10-11	実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第1回) For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される(参加者20数名)。京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
2002.3.16-17	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志 フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ~現在に至る
2002.7.13-14	実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第3回)
2003.3.15-16	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第4回) シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
2003.7.12-13	実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第5回)
2004.3.13-14	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第6回) 秋田喜代美ほか
2004.7.3-4	実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル2004(第7回)
	2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海~2009)
	2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)~現在に至る
2005.3.5-6	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005(第8回 参加者100名超) 国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
2005.7.9-10	実践研究福井ラウンドテーブル2005(第9回)
2006.3.4-5	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ(第10回) 田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
2006.7.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル2006(第11回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2007.3.3-4	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007(第12回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
	2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
2007.6.30-7.1	実践研究福井ラウンドテーブル2007(第13回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
2008.3.1-2	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008(第14回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
2008.6.28-29	実践研究福井ラウンドテーブル2008(第15回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
2009.2.28-3.1	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009(第16回)稲垣忠彦
2009.6.27-28	実践研究福井ラウンドテーブル2009(第17回)5つの領域:専門職として学び合うコミュニティ (分野ごとのセッション始まる)
2010.2.27-28	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010(第18回参加者300名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
2010.6.26-27	実践研究福井ラウンドテーブル2010(第19回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011(第20回 参加者300名を超える)門脇厚司・森透
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル2011(第21回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル2012 Spring Sessions(第22回)(名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル2012 Summer Sessions(第23回) 参加者450名を越える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会

2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 Spring Sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 Summer Sessions(第 25 回)
	11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 Winter Sessions(明治大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 Spring Sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 Summer Sessions(第 27 回)
	11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Spring Sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions(第 29 回)
	11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessions(第 31 回)参加者総数 547 名
	7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions(第 33 回)参加者総数 566 名
	10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園) 10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Spring Sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions(第 35 回)参加者総数 476 名
	10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園) 10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Spring Sessions(第 36 回)参加者総数 930 名

2019.6.21-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions(第 37 回)参加者総数 426 名	
	9.28-29	札幌ラウンドテーブル
	10.23	マラウイラウンドテーブル
	11.16-17	教育実践研究フォーラム in 長崎大学
	11.9、	教育実践研究フォーラム in 奈良
	12.15	実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
	2.8-9	宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Spring Sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度	
	3.3-4	ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Summer Sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度	
	11.21	東京サテライト・ラウンドテーブル
	11.21	関西ラウンドテーブル
2021.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度	
2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度	
	11.13	東京サテライト・ラウンドテーブル
	11.21	協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Spring Sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度	
2022.6.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Summer Sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度	
	8.4	宮古島ラウンドテーブル
	11.26	東京ラウンドテーブル
2023.2.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions(第 44 回)参加者総数 660 名程度	
2023.6.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Summer Sessions(第 45 回)参加者総数 560 名程度	
	8.25	岐阜ラウンドテーブル
	10.28	信州ラウンドテーブル 2023(信州大学教育学部附属長野三校研究会)
	11.18	東京サテライト・ラウンドテーブル 2023
	11.18-19	教育実践研究フォーラム in 長崎大学
	11.23	奈良ラウンドテーブル
	2024.1.27	岐阜ラウンドテーブル
2024.2.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions(第 46 回)参加者総数 980 名程度	
2024.7.6-7	実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions(第 47 回)参加者総数 485 名程度	
	10.20	静岡ラウンドテーブル
	11.16	東京サテライト・ラウンドテーブル 2024
	2025.1.25	岐阜ラウンドテーブル
2025.2.22-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions(第 48 回)参加者総数 819 名程度	
2025.7.5-6	実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Summer Sessions(第 49 回)参加者総数 530 名程度	
	8.29	岐阜ラウンドテーブル
	10.18	協働探究ラウンドテーブル敦賀 2025
	10.25	東京サテライト・ラウンドテーブル 2025
	11.22	協働探究ラウンドテーブル奈良 2025

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘いがない

ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村 優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの2001年3月、教師教育にかかわる20名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年2月と6月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは回数を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超AI時代、VUCA²ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちを

サポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ(革新的)なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなり、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション(解)」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョン

のもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことに

なることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウエンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

Archive

— アーカイブ —

実践研究福井ラウンドテーブルに参加していただいた方の報告をご紹介します。今回紹介をさせていただくものは、Newsletter No.174 (2023.08.23 発刊 ラウンドテーブル 2023 Summer Sessions)、Newsletter No. 180 (2024.03.23 発刊 ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions)、Newsletter No.186 (2024.08.30 発刊 ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions) Newsletter No. 192 (2025.03.31 発刊 ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions)、Newsletter No.198 (2025.08.21 発刊 ラウンドテーブル 2025 Summer Sessions) に掲載されたものです。※ご所属は当時のものです。

Newsletter No.198 (2025.08.21) より

子どもの願いや問いと共に在る

信州大学教育学部附属長野小学校 教諭 小田切洋輔

私はラウンドテーブルに参加することで、これまでの教員としての歩みをふりかえることができました。そして Zone A での実践発表とグループ討議を経て、子どもたちが主体的に学ぶとはどういうことかについて考えることができました。

実践発表を聞いて初任校でのことを考えた。当時の私は「教科をわかりやすく教えたい」「社会科を面白いと感じてほしい」という観点で素材研究、教材研究をしていたように思う。当時の私がつくった授業プリントを見返すと「あの子たちは私が考えた狭い紙の中で一生懸命考えてくれていたのだな」と感じた。そんなことをふりかえると、過去の自分に伝えたいことが浮かんできた。「子どもたちはもっとできる」「もっと子どもの声に耳を傾けよう」ということだ。今回の実践発表で、教師が子どもの声を聴き、子どもが自分のこととして考えられるよう声をかけたり、単元を展開したりしている様子を紹介していただいたことで、今一度子どもの願いや問いを基にした授業を展開したいと思った。

さらにグループ討議からも「子どもの願いや問いを授業に据える」ということを考えさせられた。グループ討議では主に「環境をつくること」が話題にあがった。グループ討議を聞いていると、以前担任をしていた小学3年生のAさんのことが思い浮かんだ。Aさんは図工が大好きで、休み時間になっても図工を続ける子だった。豊かな発想力があり、その分素材が足りなくなったり、難しいギミックが実現できなかったりすることがあった。そこで、共通のキットは用

意するが、自由に素材をもってきていいことにした。その後、Aさんは段ボールを飾り付ける単元では、用意されたキットは使わず、自分で探してきた段ボールをつかってジンベイザメのデザインの飾り付けをしていった。さらに使わなかったキットの段ボールを使ってコバンザメまで作りだした。大阪の水族館で見たジンベイザメを思い出し、思い出を形にしたいというAさんの願いが詰まっている作品だと感じた。その作品をつくる過程でコバンザメの習性や体のつくりを図鑑で調べるAさんの姿があった。図工の授業ではあるが、願いを実現するために「調べる」という学び方も行っていた。

私がこのようにAさんにアプローチすることができたのは、図工係の先生のおかげでもあった。図工室にはさまざまな素材が用意されており、子どもが素材を選べる環境が整えられていた。Zone A の発表やグループ討議から、子どもが主体的に学べる環境として、図工室の環境ができていたのだと捉えなおすことができた。

子どもの願いや問いから学びをつくっていくためには、子どもが学ぶ環境や対話ができる教職員の関係が必要であり、地域や家庭が学校に入ってくることでさらにその環境が広がっていくのだと思った。ラウンドテーブルに参加させていただき、これまでに出会った子どもの姿を思い出し、省察をする機会になった。この省察をもって、今、共に在る子どもたちと学んでいきたい。

参加できてよかったと感謝したい「研修」

福井県教育庁教職員課 主任 木下 慶之

23年間中学校理科教員を務めてきたが、昨年度から県教職員課で勤務している。業務内容は主に任用と給与に関する事務である。一日中黙々とエクセルで名簿や数字ばかり触っている日もある。業務として学校への訪問はないため、子供たちと関わることもなくなってしまった。未知なる業務ばかりで、「すみません、もう一度教えていただけますか。」と同僚たちから教わりながらの日々である。

おかげで「初任者の時の気持ち」を思い出すことができた。なかなか見通しがもてず、うまくできないことばかりで自己有用感をもつことができない。これまでの教育実践も直接業務につなげにくく、理科教員であることや、何をテーマに教員をしてきたのかを忘れてしまうのではないかという不安。まさにVUCA現象が自分の中に起きた。とりあえず目の前の業務をこなすのが精一杯。あつという間に1年が過ぎてしまった。

2年目を迎え、「このままではまずい。」と思い、「そうだ、ラウンドテーブルに参加したら何かテーマが見つかるかも！」と、「研修」を欲している状態で申込みをした。特にZONE B教師教育の今回のキーワードは「研修」や「教員育成指標」「専門職としての教師の資本」「孤立から協創」とあり、今の業務や自分の状況とつながっていると、オンラインではあるが参加させていただいた。

申込をすると、なんと！上司である遠藤課長が報告者であることを知る。そして当日、課長の報告や対話グループの方々との対話を通して、今の業務に対する意識を変えるきっかけをいただいた。遠藤課長からは、今年度更新策定された「福井県教員育成指標」や「教員研修計画」についての紹介や、どのような経緯で、どのように設定されてきたのか、さらにはそれが県内の研修機関とどう連携され、研修が企画、計画されているのかなど、福井県の教師教育の大きな仕組みやビジョンについて教示いただいた。

今まで自分が取り組んでいた業務が、そもそもなぜ必要なのか、どうして始まったのかを問いただすことができた。とりあえず目の前の業務をこなすことばかりを考えていたが、巨視的な視点で業務につい

て捉えると、みんなの業務がつながりをもって連動連鎖している。そもそも教育委員会の業務とはどう生まれてきたのか、現場（子供たち教員、地域社会）とどうつながれているのか、教育行政についても実践研究をしていきたいと新たなテーマをもつことができた。

そして、自分の上司が行政職ではありながらも教育実践者としてのストーリーを振り返り、今後の展望などを語り、研究会の場で努力されている姿を拝見できたことが、何よりも大きく勇気づけられた。身近すぎると今回のような話はなかなか聴けないものである。校長や所属長と一緒に研修に参加するのも良いものである。

ちなみに、VUCAな日々を何とか乗り越えられているのは優しい同僚たちのおかげである。1年目は三宅主任というメンター同僚が常に支援、指導してくれた。「今の僕の説明わかりにくいところはありますか？」「一緒にやりましょう！僕も勉強してみます。」という明るさと謙虚さをもっている同僚である。遠藤課長も、「大丈夫、今にだんだん分かってくるよ。」と労ってくれる。「たまには授業を見に行きたいです。」と相談すると、他のグループに同行して研究授業に参加できるきっかけをつくってくださった。

さて、グループ対話では、さくら認定子ども園の先生（園内の研修を企画されている）、そして遠藤課長と同じ報告者であった板橋区教育センターの堀内さんとの3人で交流することができた。自分で研修を選ぶことも重要であるが、研修分野のバランスをとることも重要である。一方、スキルを身につけてほしいと研修企画者が思っている、研修を受ける本人が必然性を感じていないと効果が期待できない。また、研修を受けても実践にすぐにつながるとも限らない。一度きりの講演や講座ですぐに変容するものでもない。研修環境のデザインは絶えず教員の状況やニーズに合わせて創意工夫していかなければならない。まるで授業づくり、単元デザインと同じである。

最後になるが、これからの時代、自分で自分の研修を作り上げることができるよう（自分でカリキュ

ラムを創り上げていく)能力がますます必要になってくるのではないかと感じる。そこには協創や協働が必要であり、同僚や同志、支援者や伴走者(メンターの存在)、軌道修正や労を労ってくれるような評価者の存在が不可欠である。

成長というのは緩やかなものであり、長期的な実践記録やその振り返りと展望を自分で見出すことが、やはり大切である。そう考えると教職大学院での研

修は、よい仕組みであると思う。理念を共有し、そんな仕組みがもっと社会に増えると良い。

今回のラウンドテーブルは参加できてよかったと感謝したい「研修」であった。参加すると何かしら獲られるものがあるのがラウンドテーブルである。ありがとうございました。(久々に文章を書きましたが、駄文が多く、やはり日頃から書く習慣が大切ですね)。

Newsletter No.192 (2025.03.31) より

「持続可能なコミュニティをコーディネートする」に参加して

信濃教育会教育研究所 長尾 小百合

ZoneC では、「足羽川ふれあいマラソン」に関わるボランティアを通して、持続可能なコミュニティについて考えた。

この大会は社会福祉法人足羽福祉会によって主催されており、その運営は多くのボランティアによって支えられているという。ボランティアには地域住民だけでなく、小中高大学生も社会人も、障害の有無にかかわらず、多様な人が集い、思いを共有し、協力しあいながら、ふれあいとおもてなしに満ちた大会をつくっているようだ。そのように一つのイベントを通して、日常を離れて未知の人たちとなんらかの目的を果たそうとする中で、何が生まれてくるのかを考えた時に、プラス面だけでは語りきれない、自身のボランティア経験を思い出した。

私は法学部で少年法を専攻しており、少年院のボランティアに参加した。また、少年事件の裁判の傍聴に通う中で、殺人ほう助の罪に問われた少女と文通をすることもあり、高校編入試験のために文通の中で勉強を教えることもあった。当時の私は「困っている人を助けてあげたい。悩みを少しでも取り除いてあげたい」という思いでボランティアに参加しようと決意していた。ボランティア活動に参加して間もなく、少年院のクリスマス会を主催した。体を動かしながらゲームをしたり、私たちが手作りしたケーキを一緒に食べたり、歌を歌ったり…。少年たちが少しでも明るい気持ちになればいいな、と励ましてあげたい気持ちでいっぱいだった。会の終盤、私たちを見送る少年たちの中に号泣している一人の少年がいた。その少年を目の前にした時に「こんな未熟な私が軽

い気持ちで参加してよかったのか」と、なんとも言えない気持ちを味わった。様々な職業を経て私は教師になったのだが、あの時の少年の涙、あの時の少年はどんな思いだったのかを問い続けたくて教師になっているようなものだ。ある意味私は、自分自身を変えたくて少年院のボランティアに参加していた。自分の都合でボランティアに参加していたのではないかと思った時に、涙を流した少年の心の内や育ちを何も知らないまま、そして深い心の傷を癒すこともできないのに「助けてあげたい、励ましてあげたい」という一方的な「共感」はただの迷惑行為なのではないか、と悟ってしまった。そう考えだしてから、私はボランティアに参加することは、相当な覚悟を持たないと相手に失礼ではないのかと思うようになった。また継続して参加することにこそ意味があり、単発的なボランティアに参加し、よい部分だけを見て「ボランティアした気になる」ことも違うのではないかと考え続けていた。

しかし今回のテーマは、気軽に参加できるような大会ボランティアに関してだった。私はボランティアの覚悟だとか、私の経験から得たことだとか、そんなマイナスなことを語ってしまってよいのか、非常に迷った。ボランティアに参加することのよさは十分感じている。でも手放しでおすすめできるような、そんな簡単なものではない、というのが持論だったので、私は間違えて Zone C に参加してしまったと思った。それでも恐る恐るグループ内のメンバーに私の考えを伝えると共感していただき、とても安心した。そして私の考えも変わってきた。何かの目的のために一時的に集まったボランティアであっても、そ

もそも様々な立場、様々な考えの人が交流し合う場ということに意味があるのだ。経験の長短があるからこそ、新たな考えが生まれ、持続可能なコミュニティになっていくのではないかと。そう捉えた時に、あの少年の涙を見て怯んでいた私は、実はあのコミュニティに一石を投じられたのかもしれない。かつて私が参加していた少年院のボランティアは、全員が何年も継続して参加している人たちで、もう少年の扱いに慣れているような雰囲気だった。私が加入し「私のような心構えで本当に少年たちに接してよかったのか」不安な気持ちを吐露したことで、その場の雰囲気がさっと変わったことを覚えている。「そういう感覚、大事だよ」と同じボランティアのメンバーから返されたその言葉が、ZoneCへの参加で、点と点が線になったように感じた。

人は何らかの環境を変えたいという思いは少なからずある。「変わりたい」という思いを抱えてもがき

続けることもあるだろう。自分を変える突破口としてボランティアというものがあったとしても何もおかしくない、と思えるようになった。新たなコミュニティに自ら飛び込んでいくことがまずとても大切なことで、そこに参加することで自分を知り、相手を知り、社会を知るきっかけに繋がるのだろう。まさに「ナナメの関係」なのではないか。たとえ一方的な共感であったとしても、私のように、過去の経験を何度も捉え直しながら「共感」の意味を探り続ける。それはボランティアへの参加のように、自ら違う環境に置き、自分を外から眺めたり、内から見つめたりすることで一層捉え直しが促されるのではないかと。参加したその場では本当の意味での共感になっていなくても、いつか相手に寄り添った共感になればよいのではないかと。そんなことを考えながら、もう一度少年院のボランティアに参加したいなと、ふと思えた。

Newsletter No.186 (2024.08.30) より

A REFLECTION ON THE 2024 LESSON STUDY ROUND TABLE DISCUSSION HELD AT THE UNIVERSITY OF FUKUI IN JAPAN ON 6TH JULY, 2024

Nalikule College of Education (NCE) **Richard Ngwira**

On the 6th of July 2024, I had an opportunity to attend the Roundtable discussion which was organized by the University of Fukui in Japan. It was a great experience since I was given a chance to connect with some individuals from different countries with whom we shared our experiences.

The first person to present her experience was Laurine Nichole Hartford from Florida in the United States of America, working as an Assistant Language Teacher (ALT) in Japan. She talked about her background for her to become a teacher and her experience as an educator. In her presentation, she explained that despite her mother being a teacher, she had no passion to become a teacher as such she wanted to become a Defense Attorney, but eventually

became a teacher. She also explained her passion in education and believed that “A good education is a foundation for a better future,” a quote from Elizabeth Warren. She also emphasized the importance of proper preparation in lesson delivery. She highlighted that the level of fear is inversely proportional to preparation. I was inspired by her passion for teaching. I learnt that the challenges she has gone through were just similar to what we have also gone through in our educational life.

I presented my experience as educator and based on our visit in Japan. It was a great experience to learn about the Japanese education system which emphasizes inquiry-based learning.

Learners are exposed to research projects while still young. The relationship between the University of Fukui and its attached school was pleasing. From the experience, we realized that at the Nalikule College of Education, we are under-utilizing the Nalikule Demonstration Secondary School. As such, it is something that we can learn to improve the situation as a way of enhancing the professional development of our teachers and even the student teachers that we train. I also had an opportunity to tell our friends from other countries that Malawi is another place which is peaceful and has many places of tourist attractions which are worth visiting. I noted that all these are in line with Malawi's vision of turning the country into an inclusively wealthy and safe, reliant nation by

the year 2063. This could enhance the production of a properly trained human resource that could positively contribute to the national agenda.

I would like to express my appreciation for the idea of having the roundtables. Firstly, they provide us with the chance to hear from our fellow educators and be inspired by their experiences and challenges. Listening to others' difficulties can be encouraging, as it reminds us that we are not alone in facing obstacles. Furthermore, roundtables offer an opportunity to recognize and appreciate our own work which we might not realize are already quite commendable.

Newsletter No.174 (2023.08.23) より

「探究」してみませんか？

独立行政法人教職員支援機構 特別研修員 大石 裕千

今回、私が Zone E に参加した理由は、大きなテーマが「探究」だったからである。私は現在、高知県教育センターからの派遣職員として、茨城県にある教職員支援機構で働いている。教育センターでの私の役割は、研修の企画立案・運営等の機構での実務の経験を生かしながら、教員のための研修を想定し、「新たな教師の学び」の趣旨・ノウハウを教員研修等に反映させていくことである。そこで重要なのが「探究型の教師の学び」等の「新たな教師の学び」の姿を研修の内容や方法の位置づけることである。今年度、教職員支援機構で始まったコア研修は、以下のことを目的としている。「自ら問いを立て、実践の振り返りや対話、知識の習得を重ねながら、実践を展開することで、自他の価値観を捉え直し、新たな問いや実践に向かう」持続的な探究プロセスを提供すること。このプロセスを通して、課題を探究する力や、探究的な学びをデザインし、マネジメントする力といった、教師にとって中核的(コア)に求められている力を高めること。私は派遣期間を通して、こうした「探究」を核にした研修について理解を深め、高知県教育センターでも大切にしていきたいと考えている。

Zone E がいよいよ始まった。参加者は、中学生から大学生、そして、社会人までといった方々で世代や立場は多様であった。簡単に、Zone E の流れを説明すると大きく3つである。最初に、桃太郎一行を編制する。参加者には桃太郎に出てくるキャラクターが印刷された紙が受付で1枚渡される、最初は自由に座っていたのだが、司会の合図で誰もが知っているであろう、5人から6人で桃太郎一行となるようにグループをつくり、自己紹介を行った。次に、トークショーを参観する。バラエティー番組を模した形で3つのテーマをもとにお題トークを行った。高校生と大学生がユーモアも交えながら、惜し気もなく自分を語り、それに対しコメンテーター役の方々が、自身の経験を振り返り、やはりユーモアを交えて語った。最後にみんなでトークショーをする。グループの中に一人ずつ配置されているファシリテーターが、先ほどとは違い、かなり控えめなコメンテーター役となり、個々の語りに「問い」を織り込み、本質的なパートナーシップのあり方・あり様を参加者の自分事となるようにデザインしていく。

私のグループは、偶然にも中学生、高校生、大学生（ファシリテーター）、大学院生、40代、50代の幅広い世代の6人で構成されていた。

多様な他者とのかかわりの中で一人一人の実践と経験から学び合い、聴き手によって支えられながら互いに自身の物語を語り合い、そして、語ることによって自分自身を振り返るといった体験ができた。終えてみて、2時間近く人と語り合うことは、一冊の本を読み終えた時の感覚に似ている感じがした。それは、頭の中が整理されるとともに考えが補完されていくような感覚である。何よりも、参加者一人一人の学びや気づきが保障されており、語る内容が本質的な「問い」になればなるほど語る内容は、他者から自分に主語が変化していく。それが世代関係なく一様であったことに驚かされた。今回、特に同じグループの中学生の姿が印象的であった。ファシリテーターから、「問い」を投げかけられると、すぐには反応できないが、数秒、ときには10秒近く考えた後、顔を真っ赤にししながら、自分の言葉でささやくように一生懸命に語っていた。他のメンバーの温かい眼差しと、待つ、

待ち切るといった姿勢が彼女の姿につながったのではないかと私自身は考えている。人の変容が促され、育つ瞬間には協働的な学びやコミュニケーションが取れる場、対話ができる環境といったものが大切になってくるのではないだろうか。そして、他者との対話の前後には自分との対話が偶然的ではなく必然的に起こっているのではないだろうか。このような学びのきっかけとなるのが、「探究」であると私は考えている。

帰路につきながら、「探究とは何か」という結論のない本質的な「問」に思いを馳せた。「探究とは、本来、生まれながらにヒトが持ち備えている学び方・学びのあり方そのものなのかな」と。

変化の激しいこれからの時代を生きる子供たちには、自ら問いを立て、課題を探究し、他者と協働しながら人生を切り拓いていく力が求められている。教師にはこのような子供の力を引き出せるよう、子供を主語とした探究的な学びを展開することが求められている。私自身が、探究的な学びについて考え続け、模索し続けることを決意表明し結びとしたい。

Newsletter No.180 (2024.03.29) より

「福井ラウンドテーブル Spring Sessions 2024」に参加して

長崎県教育センター 指導主事 麻生 啓介

私は長崎県教育センターに勤務しており、教職員の研修を企画運営する業務に取り組んでいます。

本県としても「新たな教職員の学び」につながるような研修講座について模索中です。今回、福井大学のラウンドテーブル（Zone F インクルーシブ教育）に参加しました。このような機会をいただき、この経験から得られた自分の気づきや今後への思いを記したいと思います。

私は、知的障害教育特別支援学校での勤務経験しかなかったのですが、今回のグループセッションで講師の体験に基づいた病弱教育への思いや幼稚園の実践発表を通して様々な方と考えを共有できたことで、新たな視点を獲得ことができ、さらに、これまで自分が大切にしていたことを再確認する機会にもなりました。それは、その子の「特性」をその子の「良さ」として捉え、集団で認めていくことが重要であることや一人一人の児童生徒が「存在意義」を感じられる学級、学校である必要があるということです。本研

修会に参加した後、別の研修会で日本理化学工業株式会社（チョークを製造し、障害のある方を多く採用されている会社）の大山社長の講演を聞く機会がありました。その講演においても、「居場所」「存在意義」など今回のグループセッションで話題になった言葉が多く聞かれました。インクルーシブ教育について考えていく上で、大切な考え方の一つであると改めて感じました。また、研修を企画する側として、今回のグループセッションにおけるテーマ設定や話題提供（実践報告）の選定、ファシリテーターの声掛け、グループ設定の方法など参考になるところがあり、今後学んでいきたいと思っています。

最後に、最も印象に残ったことを一つ挙げたいと思います。それは、ポスターセッションの中で、ジェスチャーを交えて、地域の課題を熱く語る中学生に強い衝撃を受けたことです。私はその中学生を見て、自分はいままで的人生でこんなふうには人に話をすることがない、なぜこの中学生はこんな熱く語れるん

だと思わず足を止めてしまいました。聞いている人に「伝えたい」という思いが、言葉だけでなく、体からも溢れていました。この中学生は、学校でどのように過ごしているのだろう、どんな指導を受けたのだろう、これからどんな大人になるのだろうと様々なことを考えました。私は「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、研修を企画しており、自分なりに子供の姿をイメージしていましたが、このような中学生の姿が、まさに「主体的・対話的で深い学び」を体現しているのではないかと感じました。自分の取り組みたいことに挑戦するには、そのことについて調べ、理解し、何をすべきか言語化することが大切ではないかと思えます。さらに、人に伝

えるためには、自ら伝えたいことを整理し、相手に応じた言葉や表現を工夫して話さなければなりません。その過程で、さらに考えや思いを深めていくのではないかと思います。このような力は、すぐに身に付くものではありませんが、経験を重ねて、それが自信となることで、さらに意欲を高めた取組につながっていくものだと思います。

このような子供を育てるためには、私たち教師が変わらなければいけないと強く感じました。多くの先生方と関わることができる今の職場で、自分にできることに取り組んでいきます。

Newsletter No.198 (2025.08.21) より

教育の改革と社会課題の解決も“相似形”

福井県地域探究コーディネーター 永野 龍典

今回のラウンドテーブルを通して私が強く感じたのは、「コレクティブ」「エージェンシー」「チェンジエージェント」「エコシステム」といった要素を理解し、それらを活用していくことが、教育現場だけでなく、あらゆる分野における課題解決へ重要な道筋となる、ということでした。

全体フォーラムで得られたこれらのキーワードは、『ソーシャルプロジェクトを成功に導く12ステップ』（佐藤・広石_2018）で目にしていたものの、社会を持続可能な形へ変革する文脈で語られており、私は教育の視点で捉えてはいませんでした。しかし、今回のフォーラムで触れられたことにより、「学びの相似形」に同じく、教育改革と社会変革には共通の重要な要素となることが見えてきました。

※（下記）各キーワードに対する筆者の理解

□コレクティブインパクト：異なるセクターの組織や人々が連携し、それぞれの強みを活かして協働することで、より大きな成果を生み出すこと

□エージェンシー：自ら主体的に考え、行動し、良い状況を作り出していく姿勢

□チェンジエージェント：変革を推進する人物の存在

□エコシステム：相互に影響し合う生態系の意味から転じ、連携していく仕組みを構築すること

午後のセッション Zone E（探究）では、中学生から社会人まで多様な立場の参加者との対話。話題の中心は「自分の望むことに対し心のブレーキがかかってしまい行動できない事柄を抽出。その要因を探り、打破するマインドセットを築くにはどうするか？」というものです。

私の参加した班では「他者の目や考えが気になる」という点がクローズアップされました。

この問いに対し、「その“他者”は想像上の存在なのではないか？」という問いかけから、「確かにそうかもしれない」と参加者からの共感がありました。一方で、それを乗り越えるには「思い切りも必要」との意見も出ました。更にそれに対して、「ブレーキを緩めるために、プレ挑戦をして自分を馴らしていくのはどうか」「今日のように、私生活に利害関係のない人たちの中で、それを見つけていくのはどうか」といった具体的な提案が飛び交いました。

これは、異なる立場の人々が、主体的な対話の中で、他者の視点や提案から新たな発想を得ようという共通姿勢のもと、次の一手を見出すというグループダ

イナミクスが発揮された場面であり、前述の4つの要素をミニマムな形で体験できた対話会でした。

結果として、序盤で波に乗れていなかった参加者も積極的に対話に関わるに至り、納得解を見つめられた充足感からか、閉会後の別れ際のあいさつは、絶好の波に乗れた晴れやかな表情でした。

翌日の実践報告においても、各話題に内在するエージェンシーの発揮と、チェンジエージェントとし

ての報告者が存在し、様々なバックグラウンドの聞き手達が理解者となることで、更なる意味づけと活動への勇気を受け取っていたことと思います。

これらより、教育改革と課題解決は“相似形”であり、成功へ近づく仕組みとしてこれらの要素を抑えていくことを、これからの自己の活動の推進力にして行こうと思いを新たにしました。

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。

ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。

修了生や関係機関の方の投稿も大歓迎です。

関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

教職大学院 Newsletter **No.203**

2026. 2.21 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

岐阜聖徳学園大学・富山国際大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1